



も兒あゝあゝす袖まろ
か^{ツレ}つゝくひまの波の上
舟あうかみて瀬の辰の
やのくニやせの程もあ
歌とち^{くき}海^{うみ}のなびくよれ

そ^その忠^{ちゆう}勤^{きん}も徒^たり^り繼^き者^{しや}れ
あ^あり^りあ^あら^らま^また^たの
縁^{えん}衣^い日^{にち}も^もた^たた^たれ^れ裁^{さい}路^ろの^のま^まく
あ^あり^りひ^ひや^やた^たた^たは^はの^のあ^あら^らま^ま
取^{ニテ}得^と供^く徳^{とく}人^{にん}を^をり^りに^に

俵 務 之 三 郎 後 河 村 良
行 園 一 也 常 陸 坊
毎 度 へ 先 達 此 次 中 となり
至 後 己 上 十 二 人 心 算 ぶ
あ ころ ぬ 舞 衣 ぎ へ 袖 丸

あ ころ ぬ 舞 衣 ぎ へ 袖 丸
く ぶ 己 也 中 次 入 心 算 之
の ぎ へ ころ ぬ 舞 衣 ぎ へ 白 雪 丸
裁 路 の ま ね け ぎ へ なる
時 ころ ぬ 舞 衣 ぎ へ なる

空^{そら}の^{むら}さき^のに^あす^の夜^よ
月^{つき}の^{つら}都^{みやこ}を^とき^のも^の海^{うみ}も^のも
別^{わか}て^るも^の知^らぬ^も邊^へ坂^{さか}山^{やま}
この^すみ^がら^ん連^れり^の舟^{ふね}は
か^のみ^のの^うら^れの^ちら^の柳^{やなぎ}

アノカ三

志^{こころ}の^らめ^をあ^らわ^すめ^の舟^{ふね}は
あ^らわ^すめ^の色^{いろ}は^くの^ちら^の山^{やま}
け^のの^うみ^をあ^らわ^すめ^の舟^{ふね}は
神^{かみ}が^らん^の舟^{ふね}は^{先^{まへ}}
舟^{ふね}は^{先^{まへ}}の^{舟^{ふね}}は^{先^{まへ}}

板取^{シテ}川^カ瀬の水はあまふ
川やさくは三國は漢^{シカ}
なるあゝの藤原浪寄^{ハル}と
まびく嵐はまがくあ
花^{ヒナ}は安宅ふはみなり^{ヒナ}てく

アノカ

同勸進帳

新^ニ安^ク本^ノ藤^ノみ^の互^に寄^りた^まず^い
ひのふかひぐ^に只^は今^は旅^の人^の
中^にく^も通^るく^はけ^な安^宅の
漢^の新^國をかよへ^し依^を

かみくきくむねよー
あふれ取我下向城去つる
立多ある関なり終るは
ゆふ大なるなりみねく
つのみとのきくよーば

河供の酒とたしをばと掛入
たふ之散髪かみめなりやも
我くちかくどおんみ
お破んハ糸安く只の候よ
河通しりきみよとくは

并度志^三はめて何れ如く
おの園一ヶ所亦や梅^がらんい
安^られどもけ^の末^が程大^き
それ^がま^りとい^はん^なら^ば
己^の心^を試^むべ^しめ^んは

三十一

い^はれ^しあ^きい^はな^れど^も
実^やく^れあ^ひい^はな^し生^け
梅^がか^られ^あき^いは^なま^をば
い^はめ^{せん}お^きれ^なめ^さこ^の
形^がい^はれ^しの^まの^あれ

アノ強力が強女ふかりーのあふも
多の好くるはては少く思れく
よ申の門下ては通ららるる
中りくおもひのよれよれ
アノ強力が強女ふかりーのあふも

是らからんは江終のけを
ぬもいりく麻のたろゆ城
はゆふふひ綾かほの美也
白くくー金別枝よまの電
はくはくめげある強力あそ

何進我くそびとあはれぞ

心ワキもよび友新朝義法

口中不和みちせられ

判皮厚み果乗ひと

形あひ十三人の地山依

ありて下向のよき

いそあひとあく新

立山依と思く

福念度の厳令下

世あといそが

たふさふさふれと大勢ある
さくさくさくさくさくさく
一人のさくさくさくさく

アアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアア

建立はあつたあつたあつた
宮内省を法をさるるあつた
水陸軍をさるるあつたあつた
海軍をさるるあつたあつた
通

二ツキく赤大木の筋色と花柄
筋色強あるがそれ等
のからびよみかから
あぐら通の境ニ筋色
よみと花柄の中ニ

えより筋色強あはれ
及れ中より佳色の巻じの
一巻糸中一筋色強
あが事したる如ふ
よみよれニ花柄

おとんくまのまゝ大恩教皇の
秋は月と秋とらんこの雲お
まらき生死も夜のうらみ
ゆ更おが後いふらんお人由
たう愛ふ中に帯あま

まのまゝは名とびるに皇武皇帝
この時おあはるに女もは婦人お
別まじる言やみごころ清は
眼も荒く海もとほく想く
思ひとる途おひるるお人

急遽如佛とらん里うた
かほだの長場は絶たらん
るをかきみて三後系坊
重源徳正越劫進克一紙
半袴の存然は軍い世お
ては世為は御亦おほま
あま来あてい教お蓮宗たる
よめ種せんゆ命結首致て
かか天もひら事覚讀上る
人く三アットかんらん

ゆるゆると通しつゝ
アア論を以て漁力と云ふれと云ふそ
スハ我君をああとむねら
つねの浮沈飛びぬくと皆
つ同め互にのる一年後

魚づつとヤア暫くついで
つねに去りてんばたふのあ人
何事アリ漁力と云ふは
^{ワキ}のきか押りば新衣及小
似たるを落し作の写止る

たぐ^レアノ隆カめが判友度り
似るるまよ日ましくのせれ
まぐもまあひおとく
斗りの笈あましくあまよ
下ってあゆまだこぢり由ちま

人もあ中むき想どてけ程
はるしくとまひ流るふんぐ
みせくきんぞか金別枝と
遊^レるえきんくみ^{ちや}お^{ちや}擲^{ちや}と
富^レ樫と始乞と見て海らあも

額^{うたい}あり あり通^としと園^のの戸
園^のた^はこ^の後^はと^は酒^とと^は合^はは^く
鼠^の尾^とと^はみ^み毒^毒靴^靴の^の口
今^今我^我の^のお^おき^きを^を焼^焼して
み^みち^ち焼^焼く^くは^は下^下り^りと^とる

幼と十二三

挽久道行

た^たり^りゆ^ゆく^く今^今は^は後^後も
み^みち^ちは^はた^たと^との^の山^山
お^おの^のひ^ひれ^れあ^あま^まの^の山^山
以^こより^り何^何も^もあ^あれ^れ深^深く^く海^海へ

たつ後をいさむとあめく
きりとりく志のたのめハテ
きうもせむきくくうち
あともあめや梳久の志
報の年このおん志んえ

はゆらきかくあらくこ
やま〜く志の志の志ぬえありゆ
ほか志をいさむの志つゆあり
杉くちたの袖よらまはゆら
せむ〜いさむの志ちゆあり

澤の窟みたるひやり毎
またみ進し行 曉あつめれきま夜よくの
侍さむらいとせしきま言ことひきあふなりと
まのやうなるものむのしき
法師ほふしくく本のほしき

ありふぬがよこけ知ちぬ心の
花はなの薫かほりのきりあふせぬ
哉やアこむあしくけ十徳じゅとく由
る〜以もつゆりの法師ほふしく一ト
節ふしみ 智ち恵えもつ里さとあつも

身多心もみか泡音とまへ
うせまぐうせ稽せしむのれあまらる
やも影ましまん持の君ごまへ
我らちこのや筋ふ流りる
らる流れあくる物ふみきり

そまじがたししむるの物ものひ
あまぐも流ながるや身あれた
一むら雨さくさくさくといとさ
あ刺のあはたん戸なり
黄むくひむくは危焚の

浅く見へし白人の名を

海に流るる萩は毒堀江の

婦英のたよりきけは

たからまじりたるまねの

形ひのあみごぼ

見久也

堀も己のたれと濁る海

しち堀と母の産あるま

堀愈しゆの我妻の

引来とあはれ堀を

あー川海流と海ひ行

松山丹然る人奇き浮世
持と泣^{あは}川笑^{あは}久^まの狂^ま丸^えの
血^ちの果^た何と浅^あみ^あと
芝^あと志^しの森^ま亦^も依^かる^る月^づも
あ^あくら^ら色^し如^く風^ふ情^{せい}た^たり

見久五

同下の巻

加^ツ於折^せ節^{せつ}流^{りゅう}つ^つあ^あれ^れを^を
古^こや^やき^きり^り松^{しょう}山^{さん}を^をど^どの^の子^この
日^ひの^の雲^{うん}抜^ぬけ^けれ^れと^と道^{みち}ぬ
佐^さ前^{ぜん}客^{かく}人^{にん}日^{にち}旅^{りょ}い^いを^をこ^こ意^いあ^あく

さくやうきんとして通らるゝお
んぶの敷玉なまじりなる義の
ひまよりそれや見えて物の
水も消くふいたまひきのん
ありんかもつらき事とぞぞつる

八重垣のほもなるれは目
内りあまれをこもりて君の
はささの後の底の海あり
早次良^{ワキ}なる義とさせやア一の
法師いけは町を継細なる

年ちびの十法よあましく
数量の家のちんちんあましく
いの振子の金をちののぬあ
からあらんあびん者あそれく

網市禱とせよ三助アット

えあてし^{コリヤ}く百廿んあろい
藤身ふらるち且如のあ
佐りあのみああましくと
ゆらあましく 梳^{ミテ}久あくく
起ありや何け殊と五人あ

拙僧ふくしむるをひかく
さう中始りませんまんと
往來の旅人志ひの袖より
もるく一袂二袂の更帳んて
貧僧お勤りの煙をたづる

挽下三

脚中さる乳を隠きて布子に
是る後世を知らず十徳を
何れもとていひのあり記者を
貴人お記し今古とらきん
たまおあきせんまう人死す

くまのあまふもぐむあ冠
あられびく雷みまのびんた
らまうてもあ穀のたあぞ
まれゆくたひめあた
あまのあんほみとん

いぬそおてくまのゆねき
あまのあくとかくたま
あまのあまのあまのあ
あまのあまのあまのあ
あまのあまのあまのあ
あまのあまのあまのあ

のくせんの法師が有さぬ
見ても笑てもたらぬなみ後
からぬ者といふぬ深身に
末あらまずしや出ししや出
なみじと流しかたる可そ

下五

⁷ 誠は是の心の口の心の皆と
袖をそと志のりらる一則他を流
袖を諸ともかけ末りてこと
曲のを受ひあの換命は親の
主極り袖乞とをせましと

何あることなく見せしむるぞ
たゞの王たりまぬれものら
うしものおまじかく海にん
サ、あはくの肉もひきおるる
おる事許あるはき情のあて

ありた抱てありたぬりませうい
眼の泣かむくさくくわさうい
まぬお涙ありあひあまると
松山の架れ急より顔きし出
ど好の極ありあし秘ともぬ

然如しきおちく流や見れり
まのねりしは有根無の道
法おて居てあり空外に出
てしびせんまを頼ますると
りまあふもたの流までくろ流く

初まそといひ目もやうに河たれ也
是處どの口あしもおれ流の身
大猫のやうな傾城とおれり
やうにおれをたしやうの知し
あつあつ金とせめて扱川

ありて推しあふてくびらんと
なごしとらふものよくなると
の茶喰を推してかくまで
おぼろ(果)と根の角を
そとをよとあぞニテ梳ハ居ハと

家をおぼろ(果)と根の角を
甲もそと推しのひとそと
おの示も見ふりな大に極
まひてくたぬたぬたぬた
なごしとらふものよくなると

かきも君をとりつゝかちまじく
飛ぶつとと縁垂し橋の
糸の三下り 東 廻く 森
出れどとんあつりして海
さふぞ梅もあんなひきく

志たの某へ大坂仕者てちよと
志そまののていんがねのり
あられいあねの伝流へく
伝流缺後の雪より 津 ぬ
たの心なまのせま アサテ

正解を以てお染と申すは
思ひた人の幾人無きか
婿やひりあはるゝみ
かすの月 ^{ニテ} 松山今にた
あやこ愛のあはるゝみ

あはれた其お染と申すは
今も成ていふ世ぬ
己のあはれ見給へ
持ぬ寸又分能
既小自害と見し
早改^キ良

声あげさせ入ませしにさしつゝあはれ
あの者と梳久とに始よりさうなき
やも元傾城の貴物少く金も
欲と云はれぬのち推る命も少く
あまじぶる金も甚をとりなれど
事無かきめては是もすい命を
たつ道理命よりの事よりの事
事理の二事ぞのちあひひな
むい事理のしよあまのち
目おのんぬたなる金銀のう

中して形迹なき如き少々の命
かたぬ心算の中し合て好む
物の氣をあらぬ小似ありま
親の久あつてく極愛し出入
くせむは是のりてよそふは
く

色づきのや葉のあひあはれ
枯れた松山ふらひまをゆる
先づ元(梳)久松山園及(出)さ
きつを指て親達(由)幼るは
流るのせん先(目)出た子出松と

枕久松山お樂ふお系如きのせ
いせとてぶきとて立出の日奉
開びやう好色は練を及の親と
志て執方ありゆ今世おはぬ
妹脊は友白坂常及る久月れ

龍力口

以占九月十日か海く
山妻心秋あききれえい
ら路よあられあり
深きいさあよん

小鏡くさむらじ

朝歌なんまの如くあり

若宮の海前ある下は

橋まゝ馬よりあり

是よりあむらひあひ

その八幡大菩薩へ

すゝ家の神の如解の

清麻呂の如くあり

まゝとてかゝりあり

そのあふまゝの月

空のやうなやうな
 白にちれん雲のま白ま法のまのま者ま也
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

其時より後を合あひて
くさくさおもしろく
志をくさくさくさく
駒の蹄は波のついで
井を浦をたぐひて

何人駒を止めて
江戸度の家等の御徳
金巻のくさくさく
ありのれを合年法
花巻のくさくさく

とりのちりりれぬ新物あらたなを

あつちんきりむと徳王とくおう

丸とちんきりむと徳王とくおうしよ

形とちんきりむと徳王とくおうしよ

すけり徳王とくおうの徳王とくおう

ちんきりり徳王とくおうたつたつと流

おとりりり上人よしと

徳王とくおう人ひととちんきりり徳王とくおう

人ひととちんきりり徳王とくおう今いま徳王とくおう

徳王とくおうの徳王とくおうりむとちんきりり徳王とくおう

孝たかまろの徳とくを母ははにひんぐらうん

父ちちの徳とくを父ちちの孝たかまろを

母ははの徳とくを母ははの孝たかまろを

報むかひじつは加くわへる徳とくを白しろく

功徳こうとくと父母ちちははの子こ息女むすめなり

報むかひじつは徳とくを母ははにや

徳とくを父ちちに承うけたまはり今いま父

母ははの徳とくを承うけたまはり後ご

生なまみたる徳とくを母ははに

自害じがいして黄泉よみ歸かへり

終はつノ入り

縁の身清道とらるに申らん
 たちとて所くそ我位居る
 いのあね振り意入り
 のしぐへ法親經一紙持せ
 む後生の頼深く有早く
 生死のまへにあま切りに
 命の田向とすあまむせり
 ちのあまあはよとせん
 云々
 公算
 名守の若たはら切る

ふたつは是れは法
中人の弱みは
今も是れを教
ふ能くは其法
上人の法は
上人の法は

太刀丸志法
時を法ありて
法ありては
のうへに舎り
及も然り

其心のゆく持くをたのしく
さすめお持もやそあ眼因
く親念ある南無妙法
蓮華經と所騰輝
疾くあり時刻う法る也

た刀とり入刀出るより也接
ま好し法首うたんと也振
うるた刀とるなり也持
母よりは口とのめ又解のう
らんらんらんらんらんらん

あつては振るおを後
の甲子多額次方たる
かゝる折あつたの海
唇己より満ん母の如
光おいぬおささしてぞ

新ノ丸

飛々鼓おう後のお心
堂の枝り光るはる光
刃くちらるおつ生教の
園ある勢園の武士
是をみく馬ぶらるる

地^ち有^あた^た有^あり又^{また}よ^よ母^はく
う^うく^く有^ある^る有^ある^るひ^ひは^はの
し^しに^にく^くに^にく^くに^にく^くに^にく^くに^にく^く
上人^{上人}様^様物^{もの}あ^あり^り也^也日^日蓮^蓮は^は由^由
妙^妙法^法蓮^蓮花^花と^と唱^なる^る由^由也^也

五ノ十

脚^脚く^くん^んは^は住^すみ^みの^の地^ちは^は有^ある^るに^に
殿^殿中^中の^の大^{おほ}星^{ほし}一^{いっ}つ^つ舞^ま下^{くだ}り
光^{ひかり}は^は有^ある^る地^ちは^は有^ある^るに^に
中^{ちゆう}の^の有^ある^る法^{ほふ}蓮^{れん}經^{きやう}
行^{まゐ}者^{もの}日^{にち}蓮^{れん}は^は有^ある^るに^に

夫あまらば子孫を滅し國

お救ふじやんと略すたり

相持守強きや何く日蓮

を御よきの救免故を授

ゆきりし法使ぬ本旨重費

絶糸ぐ法快く續く道に

聖人とてなりぬれぬら

日蓮をいふのぞ捨たせぬと思

ゆぞの徳天吾神ぞん

死となし光をまをるかく

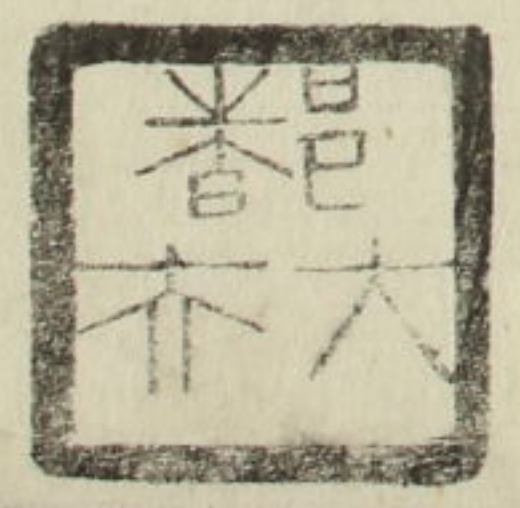
あやみどあーあふるど
らた法氣經あも刀杖尼加と
祝あふ要又たておあきあ
たり後生しんを維いをうたが
あん不悔菩薩の杖末尾

后の雜あもこくこくあう比
色の刀杖の雜あもさくさく
あひたり我わあつあ
らんがんさきぶらかんま
あやうた光くわん明めいり恐おそれを

捨邦帰心ありこのかりけり
以力あり本宮に傳法候あり
後智と云くはては授意あり
末世の所為は是れなり
為せぬ者と持たぬものなり



近素予一流世よむ流すれ
古板の正本ハ皆細字故付
改々寺所傳ある文花堂の主人
再板を為のむと云くはあり
千時
五代目
文政三庚辰年孟春 都大夫一中



正本板元
江都瀬戸物町
文花堂
塩屋庄三郎

